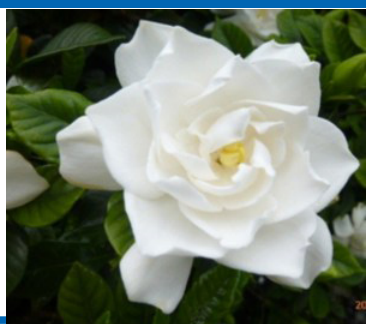
昇降機 Column ⑤

“ベータくん、エスカちゃん”

― 昇降機に、男女の別ありや？ ―

■コラムニスト、エスカレーター技術研究家　齋藤 忠一



■エレベーターは“男”エスカレーターは“女”

秋から冬の諺（ことわざ）に「秋茄子は嫁に食わすな」があり「美味しいから、もったいない」、反対に「体を冷やすから健康が心配」の二通りの解釈がある。

社会の“多様性”が問われる現代では、もし「昇降機に“男女の別”ありや？」と問われたら悩むだろう。

ただ、エレベーターの場合は明確である―「エレベータージャーナル」の巻末辺りに「ベータくん、エスカちゃん」の可愛いマンガ風の絵が載っている。

〈くん〉は“広辞苑”の最初に「統治者」がきて「天子、帝王、諸侯などを言う」とある。次に「尊敬すべき目上の人などに付けて呼ぶ語」「同輩や同輩以下の人の氏名の下に添える語。主に男性に用いる」とある。

ユニークな語釈で知られる“新明解国語辞典”（三省堂）では「国を治める人」の次に「（多くの男性が）同等以下の者を呼ぶ時に名前のあとに付けて仲間うちだという親しみと軽い敬意を表す」とある。〈ちゃん〉の方は、「（サンの転）人を表す名詞、親しみを表す呼び方」（広辞苑）、「内輪の人を呼ぶ時につける言葉。『さん』よりも砕けた言い方」（新明解国語辞典）とある。こうなると、直線的なエレベーターの「ベータくん」は男性、丸みのある「エスカちゃん」は女性、と言えようか。

小欄の5回目は、男女の呼び方や心配事、それに仕事が上手く運ぶ“褒め言葉”などについて書こうと思う。

■“男演歌”が消えてしまいそう―

優しい詩風で知られながらも24歳で急逝した詩人の立原道造、15歳（1930年）の頃の日記文を思い出した。

それには「『男なら男らしく』といふけれど、男になることがどれだけよいんだ？」という記述がある。

職場でありそうな光景―上司が男性の部下に「男ならしっかりしろ」「男のくせに」…これ、セクハラである。

4、5年前から、厚生労働省が対策を強化しているが、近辺には“セクハラ”と思われる言葉（行為も）が溢れている。こうした世相で心配なのは、もう“男演歌の時代”は来ないだろう、と言うことである。

「男なら、七つ転んで八つで起きろ」（「男なら」水原弘、高倉健）「男は黙って勝負する」（都はるみ）「男じゃないか」（川中美幸）…演歌ばかりじゃない―故・渥美清「男はつらいよ」のウリは「笑いとシンミリ」だが「女はつらいよ」のネタはその“百倍”もあろう。

■プロ野球の応援歌―「お前」考

この夏、プロ野球セントラルリーグ〈中日ドラゴンズ〉の公式応援歌「サウスポー」が「当面の間、使用を自粛」と、マスコミ発表され、球界がザワついた。

6年前、阿久悠作詞、ピンクレディー歌の「サウスポー」の替え歌を球団応援歌にしたもので「オイ！オイ！」と選手名を繰り返したあと「みなぎる闘志を奮い立て『お前』が打たなきゃ誰が打つ」のフレーズを「尊敬の念に欠ける『お前』を応援歌に使うのは子供の教育上いかがなものか」と、現与田監督が指摘したらしい（ちなみに、元歌は「背番号1のすごい奴が相手、フラミンゴみたい♪」で問題の『お前』は見当たらない）。

「お前」について、先の伝で辞書を引いてみても「尊敬の念」の有無は感じられないが、現代の若者も「嫌い、傷つく」言葉らしく、使わなくて済めば、それに越したことはない言葉のひとつである。

■“くちなし”の花は、美しいが―

昔と違って、多くの若者入社3年で職場を去る日本、その理由は先輩の言葉や生活が醸す“未来感”だと言う。

以前、“ビジネス研修”などで勉強し、今でも覚えているのは「仕事を頼む時は相手を褒める言葉を添える」ことである。「かなりややこしいんだけど、君のセンスとガッツで頼む」となると相手は頑張ってくれる。

あとは「名前付きの挨拶―（○○さん、おはよう）」「感謝―（早いね。ありがとう）」「褒める―（特に、第三者を通して伝えるといい）」…雰囲気が一変する。

“山梔子（くちなし）”の花（写真）は美しいが、表現に困って口をつぐむ（口無し）ことがないように…。

日々の習慣で、“言葉や生活”をスムーズにしたい。